〔解説〕オンライン実習と現地実習の相乗効果

香川県丸亀市における地域実習に関する講義では、この2021年度から実際に始まった現地での実習について、どのような内容で行われたかが紹介された。コロナ禍で当初の予定どおりとはならなかったものの、コーディネートをしていただいた丸亀市職員の窪田氏が、担当教員である本学教育人間科学部の山本教授とともに、困難な中を調整していただいたことにより行われた実習となった。実際、その内容は、講義録を読んでいくと、綿密に練り上げられたものとなっていたことが分かる。

まず、現地に行くことが延期かつ短縮されたことに伴い、オンライン実習という形で現地の方々と繋ぐことで、丸亀市についての説明や学生のプレゼンテーションといったことが双方向で行われた。コロナ禍により様々な取り組みがオンラインでできるようになった中で可能となった実習形式であったが、このあとに現地での実習が行われることを踏まえると、オンライン実習と現地実習を組み合わせたことは、結果として大きな学習効果があったのではないかと思われる。単に大学内での講義の受講や、身近なところで入手可能な資料による事前学習では分からないことまで、オンライン実習によって現地に行く前に学習することが可能となった。コロナ禍の制限がある中では、これが出来る限りの対応であることが推察され、オンライン実習と現地実習という二段階となった今回の実習においては、オンラインでの実習には重要な意義があったことがうかがえる。

また、現地での実習は、１・２日目が塩飽諸島を含めた丸亀市内の見学、3日目が香川大学の学生との交流となっていた。ようやく現地に入り、丸亀市の実情を体験的に知ることができた中で、特に注目したいのは、3日目の交流活動である。本学部の学生からはオンライン実習でのプレゼンテーションを同じ大学生相手に行い、香川大学の学生からは現在実践している地域活動の取り組み紹介が行われた。彼らは大学生という共通点がありつつも、大学の場所はそれぞれ神奈川県と香川県で全く異なることから、それぞれの学生が持っている視点もまた変わってくることだろう。そのような学生同士による発表であるが故に、どちらにとっても新鮮で、かつ貴重な時間であったことが、山本教授や佐藤氏からのコメントからも分かる。加えて、この交流を仮にオンラインで行っていた場合、このような大人数が参加する形では会話できる人数が限られることから、現地で行うことに大きな意味があったと思われる。この現地での交流が今後も行われるのであれば、これを発展させて、本学部の学生と香川大学の学生による共同のプロジェクトも作ることができるかもしれない。

もっとも、2021年度は講義録の中でも触れられているように、コロナ禍により夏期に1週間集中して行う予定であった実習が不可能となってしまったことから、このような実習プログラムとなった。ただ、丸亀市での実習では、当初山本教授が想定していた「学生が企画を考えて実行する」という方針のもとで、企画段階までは行うことができた。来年度以降も、実習プログラムにおいて、オンラインによる事前学習と現地実習で大学生と交流する機会が設けられれば、学生の企画はより良いものとなるに違いない。こういったプログラムに対して実りある学びとなるよう、本学部の学生には実習に向けた準備としての学習を深めてもらいたい。

（金子　佳寛）